

I can't put up with nuclear fuel circle.

# だまっちゃおられん！

核燃料サイクル施設立地反対津軽地区連絡会議 会報NO. 11 2010年6月12日発行

## 全員だまっちゃいなかった

2010年4月22日 第3回総会



4月22日（木）18：00から津軽保健生協本部2階ホールで、核燃・だまっちゃおられん津軽の会第3回総会が行われ、弘前市や五所川原、鱈ヶ沢在住の会員約40人が参加しました。

総会では、会員は5つのグループに分かれて30分間の議案討議を行いました。グループによって話し合われた内容がばらばらという課題も残りましたが、参加者全員が討論に参加し、自分の考えや思いを述べ合い、聞き合えた実り多い総会となりました。

総会には、核燃料サイクル施設立地反対連絡会から事務局次長の河内淑郎さん、核燃出前講座の開講に尽力して下さった鱈ヶ沢海と大地を守る会から会長の滝沢光樹さんから来賓挨拶をいただきました。支援の訴えに来た不当解雇撤回を求めて法廷闘争中の2人の女性も討論に参加しました。



### 第3回総会 代表挨拶

宮永 崇史

ここ数年、私はこの時代特有の閉塞感を感じています。世界的不況ということも関係があるのかもしれませんが、金回りだけではなく、精神的に行き詰まった感じがします。考えてみますに、不況あるいは社会のシステムがうまく回っていないが故に、上から下に押しつけられているといった息苦しさを感じているのでしょうか。

このような中、2年前にこの黙っちゃおられん津軽の会が発足しました。当時を振り返りますと、疲れ果てた反対運動の後に、なし崩し的にやってきた再処理工場の本格操業を目前に迎え、それでもなんか一言言わなきゃと、最後の力を振り絞るかのように立ち上がった会でした。あの2月の日の吹雪がそれを物語っています。

ところが、会が立ち上がるのをきっかけにしたように、再処理工場の方はトラブルや違反続きで、いっこうに本格操業に入らず、とうとう1年前には17回目の延期を決定し、今年の10月まで操業をあきらめなければならない事態になりました。さらに、今日の新聞にはその10月も危ないという報道がされています。

一方、我々のだまっちゃおられん津軽の会はというと、こつこつ重ねた市民講座は10回を超え、署名運動を行い、青森県への要請、日本原燃への質問、チャリンコキャラバン、さらには最近では断層を自ら調べようとするここほれわんわん企画など、非常に活動の幅が広がってきています。今日も参加いただいています。五所川原や鱒ヶ沢での出前講座を通じて、参加者の幅も広がっています。再処理工場の行き詰まりとは対照的に我々の運動は躍動してきているといえます。

しかしながら、相手は国策です。いくらうまくいっていないといっても、その広告力・金銭力はすごいものであります。まだまだ我々の運動はそこまで届きません。しかし、我々はいつか来るであろう日を夢見て、息の長い運動を続けたいと考えています。そのためには、楽しい活動、そして新しい発想がモットーです。この会を通して、我々自らが学び、活動することが時代の閉塞感を打破することができると思っています。

今日の第3回の総会が、その息の長い活動への再出発となりますよう、皆様方の熱いご議論を期待申し上げます。(Oceanus)



←地層調査する新潟大の立石教授と渡辺さん 崖の中段にいるのは八戸の科学者会議会員の松山力さん 最上段で見物しているのは竹浪事務局長(笑) 写真を撮影しているのは、この崖を登ろうとしてすり落ちてしまった高松運営委員(笑)靴が悪いのだ靴が!

# ここほれわんわんプロジェクト

## ゴールデンウィークに六ヶ所断層を本格調査

事務局長 竹浪 純

5月2～5日にかけて、「核燃・ここほれわんわんプロジェクト（以下 PJ）」の第2回目調査が行なわれました。このPJは、昨年、東洋大学渡辺教授が六ヶ所再処理工場の真下に断層の存在の可能性を発表したことに対して、日本原燃がその存在を否定している問題に、我々自身の手で決着をつけよう！という、壮大な意図で開始されました。

PJ を実施するきっかけとなったのが、昨年10月の原発核燃全国交流集会。新潟大学の立石教授が地層に関する講義の中で、「くだんの問題を解決するには穴を掘って調べればいい」との解説でした。じゃあ、穴を掘ろうじゃないか、ということで、地層には全く素人のだまっちゃおられんメンバーが、八戸の松山先生、新潟の立石先生に手紙を出し、“穴を掘って調べたいので協力して欲しい(^\_^;”と相談をしたところ、あれよあれよと、八戸から新潟から、地層の専門家が駆けつけてくださることになったのです。旅費、宿泊費はもちろん手弁当。迎える我々は恐縮しっぱなし。ほんとにありがとうございました。

5月のPJは、新潟から立石雅昭先生（新潟大学理学部地質学科教授）、渡辺秀男先生（理学博士）、大野隆一郎先生（地質研究者）の3名が、八戸から松山力先生（日本地質学会会員）がおいでになりました。我が会からは、高松氏、三浦氏、そして私の3名が、調査拠点とした野辺地松山旅館にでかけ、合流しました。

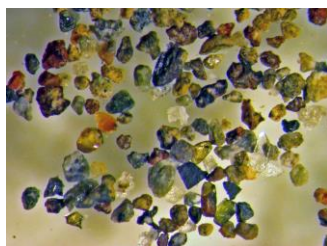
調査は、地層がむき出しに見える様な場所（露頭といいます）を探し、地層の重なり具合、地層を形成している火山灰などの鉱物学的な特性を調べました。再処理工場周辺に地層のゆがみがあるかどうか分かればいいのです。地層がゆがんでいるということは、その下に断層がある可能性が高い、ということになります。日本原燃は地層のゆがみを否定しているのです。

今回の調査では、明確な地層のゆがみを証明することは出来ませんでした。思ったところに地層の露頭がないのです。今後、文字通り「ここほれわんわん」ということで、ハンドオーガーという手動の掘削機を使って5メートルほど穴を掘ってみることも視野に入ってきました。その際は、みなさんご協力を。ハンドオーガーは弘前大学からお借りする予定です。動かす人力は若いパワーを期待しています！

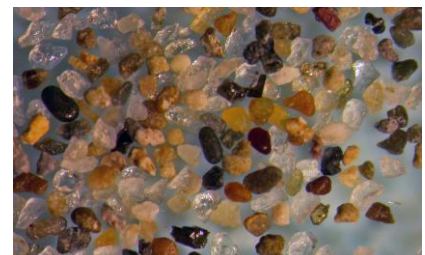
六ヶ所村 6-2 地点の火山灰の実体顕微鏡写真（粒径 1/4 ～ 1/8mm） 渡辺秀男さん提供



470 - 481 : To-Rd



491 - 492 : To-Rd



575-580 の円磨された砂粒物

## わたしならこうする対策最終解決私案

再処理工場はいつまでたっても稼動しないし、そうこうしているうちに全国から運び込まれた使用済み核燃料は、貯蔵プールにいっぱいになってしまいました。さらにそうこうしているうちに、海外再処理工場から委託していた低レベル放射性廃棄物の返還要求をつきつけられ、ややもすると六ヶ所に積み上げられそうな状況になっています。県知事は、青森県を最終処分地にはしない!とがんばっていますが、他に最終処分地に立候補する県・市町村がそう簡単に出てくるとも思えません。

事務局次長は、「最終処分地 天空へ」という大見出しの新聞が配達され、六ヶ所にぶっとんで行ったら燃料棒に火がついて空中にロケットみたいに飛んで空中に整列してた、という夢をみてうなされました。本来、中間貯蔵とはどういうことなのか、最終処分とはどうあるべきなのかを、この際徹底検証(?)してみましょう。(笑)

## ゴミおじさんになる覚悟

代表・弘大ブランチチェアマン 大坪 正一

結論から言うと、「六ヶ所にたまり続ける核のごみ わたしならこうする対策 最終解決私案」などというものを考えている暇はないし、それは私の問題ではない。ましてや科学技術庁長官(文部科学省?)の仕事でもないと思う。自分で出したゴミは自分で始末する、これこそが文部科学省的な解決策である。なにしろ、「全ての教科で道徳教育をやれ」という学習指導要領を作っているのだから。人の所にゴミを持って行くのではなくて、自分の原発敷地内に埋めるというのが道徳的なことである。これは、自宅敷地内にゴミをため込んで生活している「ゴミおじさん」と同じ生き方をするということでもあるが、まわりからなんと言われても、がんとしてゴミをため込んでいるおじさんの覚悟と根性があれば、大丈夫あなたでもできる。他人に責任を転嫁してはいけない。文部科学省も、余計なことに口出しをするべきではない。まわりから苦情が出たら、それは警察の仕事である。

## タイムマシンで処分を先送りしよう!

代表 宮永 崇史

アインシュタインの相対性理論を応用すると、タイムマシンで未来へゆくことが原理的に可能です。(逆に、過去に遡ることの方が実は難しいのです)。光速に近いスピードで旅をする飛行体では時間の進み方が遅いので、戻ってくると未来の世界になっているのです。そこで、核廃棄物を飛行船に乗せて、それを光速に近いスピードで飛ばします。飛行船の中で放射能核反応が進み、放射能は少なくなって、戻ってくるときは未来です。これはいい方法だ?? ところが、この方法には大きな欠点があります。光速飛行船に乗っている間、核廃棄物の半減期も長くなってしまい、せっかく未来にいても、放射能は減っていないのでした(残念)。というわけで、なかなか最善策はありませんね。

ごくごくまっとうに・・・

事務局長 竹浪 純

長寿命核種を短半減期にする「核種変換」の研究が進められているが、これが実用化されるまでは、使用済核燃料は原発サイトに保管する。原発サイトが満杯になったらその原発は停止する。

## 核のごみ 最終解決試案

運営委員 仁平 将

「核のごみ」(高レベル放射性廃棄物) 処分で何が問題か? 極めて半減期の長い放射性物質が含まれている点でありましょう。ロケットに積んでロケットごと太陽に打ち込むか、宇宙のハテに飛ばしてしまうのはどうでしょうか。いずれもコストが高くつくことと、もしも打ち上げに失敗した時の惨状を想像しただけでも身震いをします。

半減期が極めて長い放射性物質はやはり地球上で放射線を出さない安定した物質に転換させるしかないでしょう。それが分裂反応なのか融合反応になるのかはわたしにはわかりませんが、——。そのようなことが現実に出来るのかどうか、出来るとしてもいつ頃完成するのかわかりませんが、研究する価値はあると思いますし、現に研究しているかもしれません。

この研究が現実のものになるまでは、「核のごみ」は原発の敷地内に保管し、これ以上増やさないことが一番大事なことであると思います。



## 六ヶ所へ行って風船を飛ばそう

## バルーンメッセンジャーOperation

弘大ランチが主催して、学生や若い世代に核燃問題を伝え広げる運動の一環として、7月4日にバルーンメッセンジャーオペレーションを企画しています。企画内容は、原燃のPRセンターを解説付きで見学する他、六ヶ所再処理工場近くから風船を飛ばして核燃反対のアピールを行います。風船には、これが届いたところには確実に放射能も届きますという説明文と拾った方は投函してくださいというハガキを付けています。午後は、長年核燃問題に取り組んでがんばっている花とハーブの里の菊川慶子さんをお訪ねし、お話を聞いて無農薬栽培のハーブティーをいただきます。参加費は、学生は無料。一般参加は¥2000です。おにぎり弁当付き。お誘い合わせでご参加ください。詳しくは、チラシをご覧ください。



## 関連施設 最新情報

### 再処理工場

- 日本原燃は、4月3日からガラス溶融炉の中に落下したレンガの回収に着手しているが、まだ回収に至っていない。加熱したガラスの中から遠隔操作でレンガを拾う作業で、レンガの位置や状態はうかがい知ることができない。さらに、作業中はガラスを過熱できないので、その都度作業を中断し再加熱するということである。(2010・4・14)
- 5月26日には、遠隔操作器具を使って15度めとなる回収作業を開始し、炉底中央部から黒い物体を引き上げたのがカメラを通して確認されたが、器具を引き上げた際に落ちたようで、その後先端にレンガラしきものはなかった。(2010・5・27)
- レンガの回収に関しては、ガラス固化建屋で保安規定に基づく手続きをしていなかったことがわかっている。原燃の説明では、4月30日に建屋内の気圧が突然高くなり自動制御装置が作動しました。保安規定では工場長への報告が必要であったのに、担当者が報告せず、復旧作業を行う際の承認も得ていなかった問題。(2010・5・12)
- 3月20日、六ヶ所再処理工場のガラス固化建屋で協力会社の男性作業員が、累積被曝線量を測る個人線量計を着用するのを忘れた。管理区域内に入る前の手続きでポケットに入れようとして落とすもよう。(2010・3・31)
- 六ヶ所再処理工場の精製建屋内で、配管からプルトニウム溶液が漏れていないか検知する装置2系統のうち1系統が動作不良を起こして検知できなくなるトラブルがあった。セルの漏洩検知装置のうち1系統から床に液体約50ミリリットルの液漏れを起こしていることが、3月16日に発見された。(2010・3・17)

### 海外再処理廃棄物受入れ

- 英仏両国から返還される低レベル放射性廃棄物の受け入れ問題で、廃棄物の安全性などを審議する「チェック検討委員会」が、3月30日に都内で初会合を開いた。会議では、①低レベル廃棄物貯蔵施設の完成までに廃棄物を一時貯蔵する高レベル廃棄物貯蔵管理センターの安全性、②英国から返還される低レベル廃棄物を同等の高レベル廃棄物に換えて日本に返還する「単一返還」の妥当性③廃棄物輸送時の安全性などについて検討した。(2010・3・31)
- 蝦名副知事は、返還される低レベル放射性廃棄物について、一時貯蔵を本県で受け入れる場合は、「高レベル放射性廃棄物と同じように扱うべきではないかと考えている」と述べ、「本県を最終処分地にしない」という新たな確約書を国から得ることも視野に検討するとの考えを示した。県議会での質問に答えたもの。(2010・3・17)
- 第3回チェック検討委員会では、安全性について大きな異論が出ず、安全対策の確認もある程度進んだことから今回で検討作業を一旦終了するとした。検討が必要な項目の安全対策について一定程度確認できたとして報告書の作成にかかることを申し合わせた。(2010・6・1)
- 六ヶ所村長は、村議会の一般質問に答え、「安全性や村へのメリットを考慮しながら前向きに対処したい」と発言した。議会後の取材で「実行を約束したわけではない。安全性を前提に検討を前進させていくという意味」と説明。(2010・5・21)

### 活断層

- 日本原燃は、六ヶ所再処理工場の直下に活断層が存在することを示す新たな露頭を発見したとの渡辺教授の論文について、施設の耐震安全性評価に反映する必要はないとした報告書を国に提出しました。原子力安全保安院は、新潟中越沖地震をうけ、耐震安全性に対する新たな知見を収集し、どう対応する

か毎年報告を求めているもの。日本原燃が全国の原子力事業者と共同で収集した2009年度の情報は約3万3千件で、対象は国の機関などによる報告、学会などの報告、論文、雑誌などの刊行物。これらを整理した結果、新発見は0、参考情報は2件だった。(2010・4・28)

## プルサーマル

- ・日本原燃が六ヶ所村に計画しているMOX燃料工場と、東京電力や日本原子力発電が出資するリサイクル燃料貯蔵(RFS)がむつ市に計画する使用済み核燃料中間貯蔵施設について、国は事業許可を出した。(2010・5・15)
- ・日本原燃は、MOX燃料工場の着工時期を今年5月から10月、完成時期を2015年6月から16年3月に延期する方向で最終調整している。遅れは、国により耐震性の安全審査が長引いたことから。(2010・5・21)
- ・電源開発は、5月21日大間原発の工事現場を報道陣に公開した。4月20日現在の工事の進捗率は13.4%で2014年11月運転開始予定。大間原発は、世界で初めて全炉心でMOX燃料を使用する。(2010・5・22)
- ・もんじゅ(福井県敦賀市の高速増殖炉)が、14年ぶりに運転を再開した。(2010・5・6)

## 廃棄物処理

- ・東北電力は、4月28日東通原発の低レベル放射性固体廃棄物貯蔵所の増設について、安全協定に基づく事前了解を求め、県と東通村に計画書を提出した。既設の貯蔵所が2012年に保管容量を超えるため増設を決めた。2011年7月着工、2012年9月完工予定。

## 核燃サイクル交付金

- ・経済産業省は、5月19日核燃料サイクル交付金による地域振興計画を承認しました。これにより本年度から2020年度までにわたって青森県には、総額180億円が県や大間町、むつ市、六ヶ所村と近隣町村に交付されます。青森県の交付対象施設は、大間原発、使用済み核燃料中間貯蔵施設、MOX燃料工場の3施設で1施設あたりの交付金は60億円。(2010・5・20)

## その他

- ・日本原子力研究開発機構が六ヶ所村に建設を進めてきた「国際核融合エネルギー研究センター」の主要施設3棟が3月までに完成した。このセンターは、日欧が総事業費約920億円をかけて核融合発電の早期実現を図る先進的研究の一環として建設されたもの。完成したのは、①原型炉工学研究開発棟②計算機・遠隔実験棟③材料照射施設の工学実証・工学設計活動棟の3棟。
- ・経済産業省と東京電力、関西電力、中部電力などは、海外での原子力発電所の建設受注を推進するため、官民共同出資の新会社を設立することで合意した。(2010・5・3)
- ・気象庁は、5月12日国内で観測しているCO2について、2009年の大気中濃度の年平均値が観測史上最高だったと発表した。定点観測地点は、岩手県大船渡市、小笠原諸島の南鳥島、沖縄県与那国島。3地点の平均濃度は、過去10年間1年あたり1.9ppmの割合で上昇している。(2010・5・13)
- ・日本原燃は、施設の保安や防災活動に関する需要事項を審議した2月の幹部会議で、保安規定で出席が定められている幹部4人が欠席しているにも関わらず会議成立としていた。事務局が「必須の案内、代理をたてるように」と伝えていなかったため、結果的にチェックが甘かったと説明している。

# だまっちゃおられん活動報告

2月23日(火) 第11回運営委員会  
3月4日(木) 青森県に低レベル放射性廃棄物を受け入れるなどの請願書を送付(竹浪)  
3月9日(火)「弘大ランチ」初会合(宮永、

大坪、安藤、福田、三浦、竹浪)

- 3月13日(土) 立石教授より、六ヶ所撓曲、断層調査に来るとの連絡入る。
- 3月16日(火) 県知事名で請願への回答が届く(15日付回答)
- 3月16日(火) 弘前大ランチ第2回会合(宮永・安藤・大坪・福田・三浦)  
①科学者会議への働きかけ②21世紀講座への取り組み③学生への働きかけ
- 3月17日(水) 第11回運営委員会
- 4月22日(木) 第3回総会
- 4月30日(金) 弘大ぶらんち第4回例会(宮永、大坪、福田、安藤、太田、三浦)  
科学者会議弘大分会が会に加盟することを決定(^\_^)v 21世紀講座内容の検討  
学生向け企画の検討 他
- 4月30日(金) 花見の街宣行動(12筆)(資料:チラシ)  
(宮永、阿部、安藤晴、大坪、坂本、中澤、佐藤、窪田、三浦、竹浪)
- 5月2日(日) 核燃ここほれわんわんPJ・1日目(於、野辺地)(高松)  
新潟より立石教授、渡辺理学博士、大野氏、八戸より松山氏
- 5月3日(月) 核燃ここほれわんわんPJ・2日目(於、六ヶ所地質調査)(高松、竹浪)  
新潟より立石教授、渡辺理学博士、大野氏、八戸より松山氏
- 5月4日(火) 核燃ここほれわんわんPJ・3日目(於、六ヶ所地質調査)(竹浪)  
新潟より立石教授、渡辺理学博士、大野氏、八戸より松山氏
- 5月5日(水) 核燃ここほれわんわんPJ・4日目(於、横浜断層他見学)(三浦、竹浪)  
新潟より渡辺理学博士、大野氏、八戸より松山氏
- 5月13日(木) 渡辺秀男氏より地層調査分析中間経過報告がメールで届く
- 5月14日(金) 渡辺秀男氏より再度地層調査分析に関する考え方がメールで届く
- 5月20日(木) 第1回運営委員会

## <ブログ発行状況>

- ① 2/28 鯨ヶ沢核燃出前講座第2回開講のお知らせ(三浦)
- ② 3/4 六ヶ所を最終処分地にするな!知事に請願書送付(三浦・竹浪)
- ③ 3/11 詭弁(三浦)
- ④ 3/17 海外からの返還廃棄物の受け入れ拒否の請願に県知事から回答(三浦)
- ⑤ 4/9 小さな最新情報(三浦)
- ⑥ 4/10 海外返還廃棄物のチェック・検討委員名簿(三浦)
- ⑦ 4/18 海外再処理委託で返還される低レベル放射性廃棄物問題のその後(三浦)
- ⑧ 4/21 海外再処理委託で返還される低レベル放射性廃棄物の受け入れ拒否せよ知事要請(三浦)
- ⑨ 5/6 時代の閉塞感(宮永)
- ⑩ 5/8 ここほれわんわんプロジェクト六ヶ所とう曲調査実施

## 編集後記

- ◇ 当会は、申し入れや公開質問状の提出、街宣、署名運動などのマジメな活動と運動して、ユーモアスピリットにあふれた活動も行うのが基本方針です。このたび、大坪代表が「核燃カードゲーム」の作成に取り組んでいます。ルールが有効かどうかを確認するため、みんなで一生懸命遊んでいます。ゲームは3種類。夏までには完成させ頒布したい方向です。
- ◇ ここほれわんわんプロジェクトでは、新潟からの調査団を迎え3泊4日の大調査を実施しました。ビニール袋に採取された土は、わたしの目にはどれもこれも全部「土」にしか見えませんが、後ほど、渡辺さんから顕微鏡写真を送っていただき、その美しさと個性に目を見張りました。素人が見ても全然違う。なるほど、分類できるわけだと納得しました。宮沢賢治の表現を借りれば、「金剛石をばっと散らしたような」「土」の知られざる姿でした。

## 日本科学者会議弘前分会が加盟

日本科学者会議弘前分会が4月に総会を開き、当会への加盟を決めました。分会長が安藤房治さんなので、今後安藤房治さんは科学者会議代表として運営委員会に参加します。

発行：核燃料サイクル施設立地反対津軽地区連絡会議事務局

連絡先：080-5229-6076(竹浪) takenami@coral.ocn.ne.jp